

---

# ひみつのひ

廣瀬 るな

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ひみつのひ

### 【Nコード】

N5648D

### 【作者名】

廣瀬 るな

### 【あらすじ】

ほどよく均整のとれたそこそこモテ系スポーツ少年Y。そのクールな言動とは裏腹な、振り回されっぱなしの恋模様のお話。阿呆な友人達が彼をもちたてております。

**第一話 俺、絶好調なのか？（前書き）**

らぶえっち、いたしております。12歳以下のおこちゃまは、ペー  
ジ戻ってね。

## 第一話 俺、絶好調なのか？

火照る体にシャワーを浴びて、俺はゆっくり部室に向かった。

篠崎陽介 18歳 自称イケメンサッカー少年。

とすぐそこで悩める少年A に出会う。

「陽介、俺最近、ヤバいんだわ。」

つて、どうしてつて聞くだろう？

「なんだか寝ても覚めてもミキちゃんの事ばっか考えちゃうんだよね。」

つまりはさ、

「はいはい、恋煩い？のろけ？ごちそうさまです。つき合ってたんだからそんなもんじゃねえの？」

俺は無造作に部室に入る。

「ういっす。」

相変わらず埃っぽいこのお部屋。

「それだけじゃなくてさ。」

阿部氏はしつこく食いついてくる。

「なんて言うのかさ、この、若い情熱を。」

身悶えるなよ、こんな所で……

「爆発させたい訳よ。」

まあ、言いたい事は分かるぞ。だって俺たちお年頃だからな。

「だからさ、相談のつてよ、陽介。お前彼女いるつて噂じゃん？」

「人の事なんかどうでも良いだろ。それより良いんじゃないネエの？いたしても。彼女だつてその気あんでしょ？」

「でもさあ、彼女初めてっぽいのよ。」

彼は頬を膨らませた。ガキか、お前は。俺はミキちゃんのほっそりした足と、なんだかいつも濡れているような唇を思い出した。

「誰でも初めては有るだろが？」

真っ昼間のラブホ街を男と手を組んで歩く彼女を知っている、そんな思い出を俺はきわめて忘れる事にした。当人同士の問題だしな。

「つき合ってたんだし、正常な高校生ならありでしょ。手え出さないでいるとインポヤローだと思われるだけだし。」

嘘か本当か、初恋に悩む少年は、唸る。しかもしつこい。

「う〜」

俺はバッグの中から“ダーダン”というスポーツマッスル系男の子の読み物雑誌、というのを出した。

これ、毎回テーマが同じで（逆三角、とか、腹筋、とかスリムとか、見せボデイとか）マンネリなんだけど、買うのが止められないんだよね。きつとあれだ、女の子がファッション雑誌買うのと一緒に。

ページをめくる俺に、阿部氏

「陽介は」

って、マジ、しつこい。自分で考える。俺の頭を使うんじゃない。

それに、さっきから周りの奴らが興味津々で聞き耳たててんのがわかんねえかなあ。

「溜まんない訳？」

そう来たか。

「まあね。」

「もしかして、全然おっ起たない方ですか？」

ってお前、そんな事ねえだろう。そんな済まなそうな顔するなよ。

むしろ反対だって言うの。俺はため息をついた。もう、言ってやれ。

「俺にも俺の悩みが有る訳。俺の場合トレーニングして疲れるだろうで、そのあとしつかりクールダウンなんかすると、反対にやりたくなってしまうがなくなるんだよ。疲れてでかくなるなんて、おやじみてえだ。」

「つつことは、何ですか？今陽介は、やる気満々??」

違うよ!!!ここで引くなっ!!!俺にその趣味はない!!!全く。そん

な言葉を俺は飲み込んだ。クールダウンが終わってしばらくしてから  
の事だうて言うの。

「俺の意思とは関係なく、起っちまうってことだよ。」

するとなんだかそばにいたエロ眼鏡の透が

「陽介、バイアグラの話か？」

と来たもんだ。

「いや、そうじゃなくて、こいつ、その気もないのに起つらしいから。」

「発情期？馬並み？」

お前なあ……。とその時だ。

「馬鹿だね。」

……。その声は、部屋の奥から聞こえて来た。聞き間違えるはずは無い。野口朝香。サッカーのコーチの妹で、なんちゃって、マネージャー。学年一の秀才でジャージの似合う女子ナンバーワン。その眼鏡の奥で両の目がきらりと光った、気がした。

ひみつのひ      つづく

## 第一話 俺、絶好調なのか？（後書き）

どこにでもいそうなお年頃の少年のお話です。熱中する趣味も有り、悪友との仲も良ろしく、今時らしいルックスでクールに構えていて。そんな“傍観者の彼”なのですが、自分の恋愛には不器用に生きています。

## 第二話 恥ずかしくないのかよ、お前ら

彼女は気まずく引いている1年生を尻目に、俺の所までずんずん近づいて来た。それからダーダンをひょいっと取り上げ、

「交感神経と副交感神経の問題だよ。練習中で緊張していたり、どん底まで疲れていると交感神経が働いて、防御システムが作動しているから、起たなくなるんだ。つまり、子づくりに適さない状況だと体が判断するという事だ。反対に、リラックスしている状況だと副交感神経が作用し、生活における次の段階、つまり体を休めたり、子孫繁栄に励む事を推奨する、こういう事だ。」

それからダーダンをぺらぺらとめくり、

「56ページ。」

と持っているマーカード印をつけた。

なんてヤツ……。

みんなが覗き込むそこには、トレーニングにまつわる質問の項目が。その上、まさに俺の悩みそのものが載っていた。

「お疲れマラって言うんだあ……。大人の言葉だね。」

阿部氏がなんだか納得した顔で頷いていた。

あげくに彼女は

「だから、君は非常にいい状態という事になる。しっかり負荷かけて練習して、その疲労もしっかりとれて、なおかつ自分の生活に励める、という事だ。」

「見習わなきゃいけないなあ」

透がにやにやと俺を見る。

「それか、練習量が足りず、よって負荷が足りないから回復が早い、かな。陽介君。」

彼女はポーカーフェイスで部屋に嵐を巻き起こし、去っていった。

しかも、どこからどこまで聞いていたのか、そのドア越しに本物のマネージャーの小川よしのが真っ赤な顔をして立ち尽くしていた。

その帰り道、透が俺の顔を小突いた。

「これで練習量増やされたら、お前のせいだぞこのエロやろつ。」  
んなことねえだろ。俺は肩をすくめた。

「それよりさ、あの噂知ってる？」

チエリーな阿部氏が嬉々としてターンをかまし俺の顔を覗き込む。

「委員長、野口コーチとつき合ってるってよ。」

委員長というのは、野口朝香の事だ。

「まさか。」

透が渋い顔を作る。

「それがマジでさ。マジ、兄貴とつき合ってるんだって。この前いちやこいてたって、ミキが。」

「血のつながりないって聞いてたけど、本当かよ。」

「だろお？しかも二人暮らして、コーチ言ってたじゃん？義理の妹と毎晩同じ屋根の下、あんな事も、こんな事もしたい放題……

・つて!!」

思わず俺はこの童貞ヤローの頭を鞆ではったおしていた。

「んな事、口さけても言うんじゃないぞ。聞かれたら、シャレなんねえ。」

それから、小さく聞こえていた足音の方に振り返った。

「今の話、聞いてないよな。」

すると小川が困ったように、曖昧に首を振った。

ひみつのひ つづく

## 第二話 恥ずかしくないのかよ、お前ら（後書き）

陽介君の本命は誰でしょう。彼女のキャラクターが先に思い浮かんで、そんな彼女にお似合いの男子“陽介君”をイメージしてきたお話なんです。

### 第三話 他人の事と自分の事は全く別ものってヤツね

いつもの双喜亭でラーメンライスを食べながら、結局こいつらとだべる事になる。せつかくの金曜の夜なのに予定が無いのがちと寂しい。

「でもさ、陽介、小川ちゃんとき合ってるって噂有ったけど、あれはどうなったの？」

猫舌の阿部氏はハフハフしながら、ラーメンを高く持ち上げすすっている。

「でまかせだよ、んなの。それより、てめえの心配しろよ。」

「でもさあ、さっき一緒に帰った時の小川ちゃんの目、うるうる乙女だった・・・！」

俺はこいつのラーメンに思いっきり胡椒を振ってやった。黙れって。涙目のヤツを良いきみだとほくそ笑んだ時、俺の携帯が静かに震えていた。

どうせ母親が帰り遅いからどこかで飯食えて話だとその時は思ったけど・・・

「！！！」

メールの内容に俺は思わず、息をのんだ。

“来たければ”

たったそれだけ。

その時の俺の顔を後で阿部氏は

“阿呆面”

と言ったらしいがそんな事どうでも良かった。

俺は店を飛び出し、それから

“悪い”

と言っていた、ハズだ。

彼女の家はマンションで、そのエントランス、一時でも惜しくつ

て、息切らしたまま1201号を押す。

エレベーターがもどかしく、一気に駆け上がりたくなって、気持ちを抑える。俺ってもしかして阿部氏よりガキ？

ブザーを押しても返事が無くて、もしか、開いている？ってノブをまわすとそのまま反転し。

“ゲート開けたんだから、入って来ていいんだと思わないのか？”  
初めての時に言われた言葉を思い出す。

その戸口の向こう側、掃除機をかける彼女が笑った。

「早かったな。」  
と。

ひみつのひ

つづく

### 第三話 他人の事と自分の事は全く別ものってヤツね（後書き）

他にもお品物書いてます。よろしかったらごらんになってください  
ね。甘辛い恋愛が大好きだ〜

#### 第四話 俺が誰の事好きか分かってんの？

彼女は家でもジャージだった。そのくせ細い手首ののぞく袖口はがぼがぼで、華奢な体をより繊細にみせていて、どうしようもなく女らしいから憎いと思う。それから指を俺の首の後ろにそっと回し、乱れていた襟を直してくれて。その緩慢な仕草に俺の脈が一気に上昇する。

俺が戸惑うから、彼女がからかうように微笑んでほんの少し体を引いた。つまり、あがって来い、という仕草。

俺は彼女のベットを拝借し、その前で彼女が横座りで見上げている。

俺は阿部氏に劣らず、落ち着かなくなる。

ってか、やっぱ、それ、反則。

眼鏡の上からのぞく長いまつげがわざとらしいほどゆっくりと上下した。

「そういう事だったのか。」

といわれ、何の事かすぐ判る俺。

彼女の物言いは独特で、必要最低限しか話をしない気がする。でもそれは彼女が俺の事を良く知っていて、俺の思考を読んで放つ言葉だから、すべてののつじつまが合う訳で。

「いや、あれは……。」

言いよどむ俺の膝に、彼女はころんと頭を寄せた。

「ほら。」

それは彼女らしからぬ言葉。その吐息が俺の指先をかすめた。

「抱きたいだけなのかと聞いているのに。」

そんな事は無い、という言い訳よりも、ごまかす心が先走ってしまつて……。

「つてお前がさあ……。」

俺は彼女の肩を掴みむりやり引き上げ、

「お前が俺とつき合ってる事、言うなって言うからだろ？」

って、不満をぶつけていた。しかも言い出すと止まらないし。

「なんで俺ばつか、我慢してる訳？今時中坊でもカレカノ言ってるじゃん。お前の事見るのも駄目って？どうしてこそこそするんだよ。そんなの意味ねえし。無理だって、そんなの。」

だって俺、お前の事になると、めちゃくちゃになっちまうし。

俺たちがつき合ってるって宣言して、お前の事教室まで迎えにいたり、一緒に昼飯食ったり、手をつないで帰ったり、図書館の隅でいちゃこいたり、見せびらかしたり、おおっぴらに他の奴ら牽制したりしたいし……。

その時、彼女が猫の様にしなやかに俺の膝の上に乗った。

「だから、馬鹿だって。」

いらだつ俺の声と対局の、優しく甘くささやく声。

「言い訳を聞きたいだけなんだけどな。」

その言葉に俺は少し冷静になる。

「……俺がお前の事抱くのは、別にそう言うタイミングで盛りがつくからじゃなくて、単純に、本当、お前の事好きだからで……。……愛してるから、つながりたいって思うからで。他の誰でもいいってもんじゃねえし、やつぱ、お前じゃなきゃ……。最後、自分で言ってて恥ずかしくなって、声薄れて。ごまかされているって自覚は有っても、抗うなんてできやしねえ。チキンな俺でも、それでも良い事はある。」

「その言葉が欲しかった。」

そう言うとな彼女は俺の首に両腕を絡め、とびつきり甘いキスをした。

彼女の足の指をかむ。

「うんっ……」

声を抑えて身悶える姿が可愛くて、ぞわりと舐め上げる。

「あっ！」

ジャージの裾を噛み、とろけそうな彼女を剥き出しにした。ほんの少し、隠すように、誘うように腰をくねらせ、

「すけべ。」

と囁く。そんな彼女に俺は溺れてる。

「そうだよ、すけべだよ。ってか、お前がそうさせるんじゃない。」

すると彼女は満足そうに小さく笑った。

「本当、陽介って馬鹿だ。」

その目が言っていた。きて、と。

つづく

第四話 俺が誰の事好きか分かってんの？（後書き）

次回最終話です。

## 第五話 こういうのも幸せだね

家族が帰ってくるかもなゝなんて事、その時の俺の念頭からはすっぱ抜けていて、目が覚めた夜9時に慌てた。

「大丈夫。」

柔らかい唇が俺の耳を含み小さな音をたてた。

「兄貴研修で2日間留守だから。」

という事は……俺の思い過ごし？

「これから一緒にお風呂入ろう。さっぱりしたら軽くつまむ物持ってベッド戻って。朝になったらも一度シャワー浴びて。それから朝ご飯にパンを買いにいくだろう？陽介が目玉焼き作って、私がコーヒーを入れて。あさつての夜まで、陽介の妄想ライブラリーのフルコース、いかない？」

「えっえ、えっ……！」

俺は慌てた。そんな、願ってもいない、朝香に限ってあり得ないようなオファー……

「嫌か？」

さも意地悪そうに彼女が微笑む。んな訳内だろう！！

答えるのもどかしく、俺は彼女を抱きしめていた。

「嬉しくないはずが無いだろう、この、馬鹿！」

あとから思えば、よくこの時の俺は“馬鹿”なんて言えたものだと思う。

とにかく、舞い上がってしまった俺は、そのままもう一度彼女に愛ってヤツを注ぎ込んだ。

くたくたに啼き疲れ、それでも健気に目を開けようとする彼女のぼんやりとした視線が俺の心をとらえて離さない。

「手えっないで買い出しにいこうぜ。」

「うん。」

「飯、一緒に作る。」

「うん。」

「エプロンお揃いの有った方が良さな。」

「うん。」

「今晚カレーにサラダが食いたい。」

「うん。」

「デザートに、お前の体に生クリーム塗っても良い？」

「・・・うん。」

「キスマーク付けていい？」

「うん。」

指絡め、足絡め、嬉しいでいっぱいの気持ちで俺は彼女を抱きしめた。

「愛してる。」

実のところ、人一倍独占欲が強くて了見の狭い俺。彼女の事を誰かが見ていると気づいた瞬間、ムカつく。

経験だったら断然俺のが上のはずなのに、いつも振りまわせられて、主導権握られ、イライラする。

でもこいつには敵わない。

「惚れた弱みってヤツか。」

俺は彼女の首筋、制服からぎりぎりいっぱい見えてしまう、もちろん彼女には見えない場所にキスマークを落とした。

たちの悪い俺のファンだかなんだか知らない奴らが

「ふさわしくない」

なんてちよっかい出してくる事ぐらい予想つく。そんなのソッコー蹴散らしてやるし。

知った顔の大人が

“強化選手なんだから不順異性行為は、云々”

言っただけでこいつに迷惑かかる事ぐらい想定内。大丈夫、俺、お前といたら結果出せるから。

「だからいい加減、諦めろ。」

つてな。

ひみつのひ

おわり

## 第五話 こういつのも幸せだね（後書き）

シンデレレ？

可愛い高校生カップルのお話でした。

この次のタイトルは“妄想ライブラリー” っていうかでしょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5648d/>

---

ひみつのひ

2010年10月9日20時06分発行